

# ホレおばあさん

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫



ある後家ごけさんに、ふたりのむすめがありました。そのうちのひとりにははたらきもので、美しい子でしたが、もうひとりはみにくいうえに、たいへんななまけものでした。

けれども、後家ごけさんはこのみにくいなまけもののほうの子をずっとかわいがっていました。だって、この子はじぶんのほんとうのむすめなんですからね。もうひとりの女の子のほうは、うちじゅうのしごとをなにならなまでにまでやって、年がら年じゅう、灰はいだらけになつていなければなりませんでした。

かわいそうな女の子は、まい日大通りへでて、泉いずみのそばにこしをおろして、指から血ちがでてるほど、たくさんの糸をつむがなければなりませんでした。

さて、あるときのことでした。糸巻いとまきが血だらけになりましたので、女の子は泉いずみにかがみこんで、糸巻いとまきをきれいにあらおうとしました。ところが、糸巻いとまきは女の子の手からするつとすべつて、泉のなかにおちてしまいました。

女の子は泣なきながら、ママ母のところへかけていって、とんでもない失しつぱい敗ばいをしたことを話しました。ところが、ママ母は女の子をひどくしかりつけました。しかも、女の子をすこしもかわいそうだななどは思わないで、こういいました。

「糸巻いとまきはおまえがおとしたんだから、じぶんでひろつといで。」

こういわれて、女の子はすずごと泉いずみのところへひきかえしました。けれども、どうしていいのかわかりません。とうとう、思いあまつて、女の子は糸巻いとまきをとるために、泉のなかへとびこみました。と、女の子は気をうしなつてしまいました。

やがて、ふと気がついて、われにかえつたときには、どうでしょう、女の子は美しい草く原さはらにはあるではありませんか。お日さまはきらきらとかがやいて、あたりには何千という花がさきみだれているのです。

女の子がこの草原を歩いていきますと、やがてパン焼やきかまどのあるところへきました。かまどのなかには、パンがいつぱいはいつぱいありました。ところが、そのパンが大きな声でよびかけました。

「ああ、ぼくをひっぱりだしてくださあい。ひっぱりだしてくださあい。でない、ぼくは焼やけ死しんでしまいます。もうとつくに焼やけあがつているんですもの。」

それをきいて、女の子はそのそばへいつて、パン焼やきにつかう小さなシャベルで、パンをひとつのこらずじゅんじゅんにだしてやりました。

それからまた、女の子はずんずん歩いていきました。やがて、リンゴがすずなりになつ

ている一本の木のところへきました。すると、そのリンゴが声をはりあげて、よびかけました。

「ああ、わたしをゆすつてください。わたしをゆすつてください。わたしたちリンゴは、もうみんなじゆくしきつています。」

そこで、女の子が木をゆすつてやりますと、リンゴはまるで雨のように、ばらばらとぶつてきました。女の子は、こうして木にリンゴがひとつもなくなるまで、ゆすつておとしながら、それをひと山につみあげました。そうしておいて、女の子はまたさきへ歩いていきました。

さんざん歩いたすえ、女の子はようやく一軒けんの小さな家のまえにきました。家のなかからは、ひとりのおばあさんがのぞいていました。ところが、そのおばあさんの歯はがあんなり大きいものですから、女の子はすっかりこわくなって、にげだそうとしました。すると、おばあさんがうしろから大きな声でよびかけました。

「なにがこわいの、おまえ。わたしのところにおいで。おまえが、うちのしごとをなんでもちゃんとしてくれるつもりなら、きつとおまえをしあわせにしてやるよ。おまえはね、

(1) わたしの寢床ねどこをきちんとして、それをよくふるって、羽根はねがとぶようによく気をつ

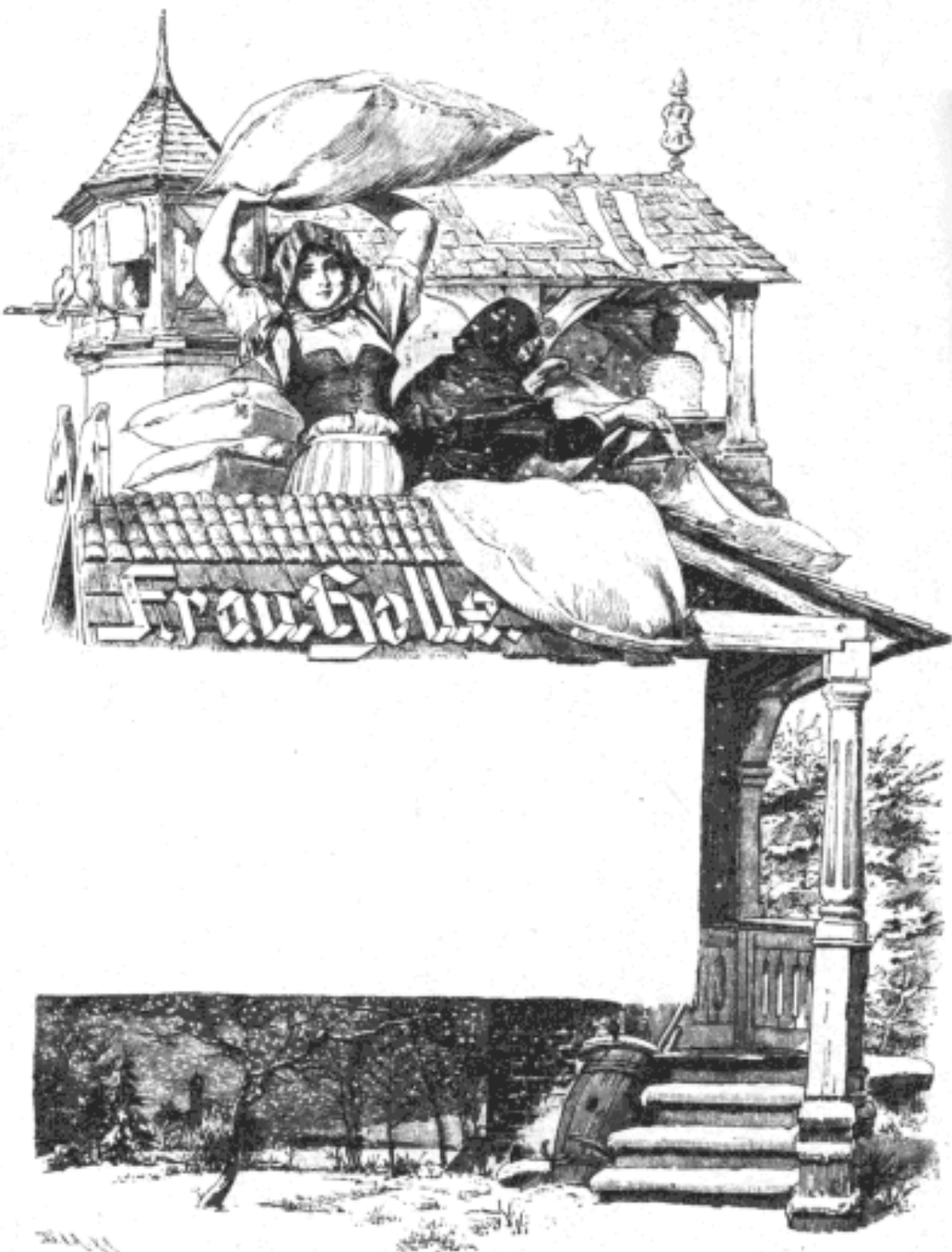
けてくれればいいんだよ。そうすれば、人間の世界せかいに雪がふるのさ。わたしはホレおばあさんなんだよ。」

おばあさんは、いかにもしんせつにいつてくれます。そこで、女の子は思いきつておばあさんのいうことをきいて、このうちに奉ほうこう公することにしました。

女の子は、なんでもおばあさんの気のように、よく気をつけました。寝床ねどこもいつも力いっぱいふりましたから、羽根はねが雪のひらのように、あたりにとびちりました。おかげで、女の子はおばあさんからごごとひとついわれることもなく、まい日まい日、煮にたり焼やいたりしたごちそうを食べて、たのしくくらしていました。

こうして、女の子はしばらくのあいだホレおばあさんのところにいましたが、そのうちに、なんとなくなしくなってきました。はじめのうちは、どういうわけなのかじぶんでもわかりませんでした。とうとう、生まれたうちがこいしくなってきたのだということに気がつきました。ここにいるほうが、うちなんかにいるよりも何千ばいしあわせかわからないのですが、それでもやつぱり、うちへかえりたくなくなったのです。それで、とうとう、女の子はおばあさんにじぶんの気持ちを話しました。

「あたしはうちへかえりたくってしかたがないんです。地面じめんの下したのここにいます。あ



わせでしようけども、もうどうにもがまんができないんです。どうしても、地面の上のうちの人たちのところへいかずにはいられません。」

すると、ホレおばあさんはいいました。

「おまえがうちへかえりたくなつたとは、うれしいことだね。おまえはほんとうによくはたらいてくれたから、わたしがおまえを上までつれていってあげよう。」

こういって、おばあさんは女の子の手をとつて、大きな門のまえへつれていきました。

門がひらかれて、女の子がちょうどそのま下に立ちますと、金の雨がはげしくふつてきました。そして、その金きんがみんな女の子のからだにくつつきましたので、女の子はからだじゆう金だらけになりました。

「それはおまえにあげるよ。ほんとうによくはたらいてくれたからね。」  
と、ホレおばあさんはいいました。

それから、おばあさんは、女の子の手から泉いずみのなかへすべりおちた糸巻いとまききもかえしてくれました。そのとき、門がしまりました。と、いつのまにか、女の子は、地面じめんの上の人間の世界せかいに、それもおかあさんの家からあまり遠くないところにあがっていたのです。

女の子が家の庭にわのなかへはいりますと、井戸いどの上うへにいたオンドリがなきさげびました。



## コケツコツコー

金きんのじようさまのおかえりだあ

女の子はうちのなかへはいつて、おかあさんのところへいききました。ところが、こんどは、女の子がからだじゆうに金をつけているものですから、おかあさんも妹もさかんにちやほやしてくれました。

女の子はいままでのことをのこらず話しました。おかあさんは、この子がどうしてこんな大金持おおかねもちになつたかを、ききますと、もうひとりのみにくいなまけものの子にも、おなじしあわせをさずからせてやりたいと思ひました。

こうして、もうひとりの女の子は、おかあさんのいいつけで、泉いずみのそばにすわつて、糸をつむぐことになりました。

女の子は糸巻いとまきを血ちだらけにするために、じぶんの指をつきさして、手をイバラの垣かきのなかにつつこみました。それから、糸巻いとまきを泉いずみのなかへほうりこんで、すぐそのあとからじぶんもとびこみました。

この女の子も、まえの子とおなじように、いつのまにか美しい草原くさはらにきていました。そして、おなじ小道を歩いていきました。女の子が、あのパン焼やきかまどのところまでき

ますと、またまたパンがさげびました。

「ああ、ぼくをひっぱりだしてくださあい。ぼくをひっぱりだしてくださあい。でない、ぼくは焼<sup>や</sup>け死<sup>し</sup>んでしまいます。もうとつくに焼<sup>や</sup>けあがっているんですもの。」

ところが、それをきいた女の子は、

「あたし、じぶんのからだをよごすのはいやよ。」

と、いいすてて、さっさと行ってしまいました。

それからまもなく、あのリンゴの木のところへきました。すると、リンゴが大声でよびかけました。

「ああ、わたしをゆすつてください。わたしをゆすつてください。わたしたちリンゴは、もうみんなじゆくしきつっているんです。」

ところが、女の子はこたえていいました。

「なにいつてんのよ。そんなことをすれば、あたしの頭におっこちるかもしれないじゃないの。」

こういつて、女の子はずんずん歩いていきました。やがて、ホレおばあさんの家のまえまできました。女の子は、おばあさんの歯<sup>は</sup>がとつても大きいことは、もうまえからきいて

いましたので、ちつともこわがりませんでした。そして、すぐにおばあさんのところに奉ほう公こうすることにしました。

女の子は、はじめの日は、むりにせいをだして、おばあさんのいうとおり、いつしうけんめいはたらきました。だって、こうすれば、おばあさんがお金かねをたくさんくれるだろうと思つたからです。

けれども、二日めになると、もうなまけだしました。そして三日めには、もつとなまけて、朝になつても、どうしてもおきようとはしませんでした。

ホレおばあさんの寢床ねどこをきちんとなおすことは、この女の子の役めやくになっていたのですが、それもしませんでしたし、羽根はねがまいあがるほど、その寢床をふるいもしませんでした。

ですから、たちまち、ホレおばあさんのほうでまいってしまつて、もうはたらいてくれるのはけつこうだ、と女の子にことわりました。

それをきいて、なまけものの女の子はすっかりよろこびました。きっと、いまにも金きんの雨がふってくるだろうと思つたのです。

ホレおばあさんは、この子もじぶんで門のところへつれていってやりました。ところが、

女の子が門の下に立ちますと、こんどは金のかわりに、大がまにいつぱいはいつたチャンを、ざあつとあびせかけられました。

「これが、おまえのしてくれたしごとのほうびだよ。」

ホレお婆あさんはこういうと、門をしめてしまいました。

こうして、なまけものの女の子はうちへかえってきましたが、からだじゆう、チャンだらけになっていました。井戸いどの上うへにいたオンドリがそれを見て、なきさけびました。

コケツコツコー

きたないじようさまのおかえりだあ

このチャンは女の子のからだにこびりついてしまつて、一いっしょう生のあいだどうしても  
れませんでした。

(1) ですから、この話のでどころのヘッセン地方ちほうでは、雪がふるとき、ホレお婆あさんが寝床ねどこをなおしている、といひます。





# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集（1）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

入力：sogo

校正：チエコ

2020年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# ホレおばあさん

グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>